



第一回

東京無地染と

若手の作品展

江戸の色・染のこだわり

ワークショップ

手ぬぐい絞り染
ボカシ染体験

1,500円

《日時》

平成29年 4月

最終日 ◀ 3日目 ◀ 2日目 ◀ 初日

9	8	7	6
日	日	日	日
日	土	金	木
10時～17時	10時～17時	10時～17時	13時～17時

《場所》 深川江戸資料館

(レクホール)

《主催》 東京都染色工業協同組合

《後援》 公益財団法人 東京都中小企業振興公社

東京都伝統工芸品産業団体連絡協議会

東京都伝統工芸士会

江東区伝統工芸保存会

江東区教育委員会

《協力》 江東区深川江戸資料館

販売 展示

東京無地染
東京都指定伝統工芸品
地域団体商標登録済



作業工程

染色



染料「水又は熱湯で攪拌」、助剤「緩染・均一」、温度、時間等を配慮しながら指定の色に染め付けます。

色合わせ



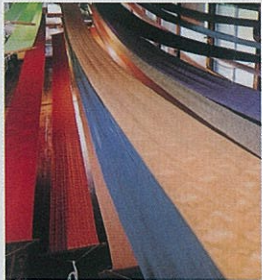
色はまさに千差万別。長年に及び職人の勤と技がここに発揮される緊張の一瞬です。色を構成している明度、彩度、色相の染液を創作し見本と同じ色に染め上げます。

水洗い



染め上がった生地は、絹特有の光沢、絹鳴り、手触りを付与するため、十分な清水にて染色時の不純物を除去し、続いて堅牢度向上のための後処理を行います。

乾燥

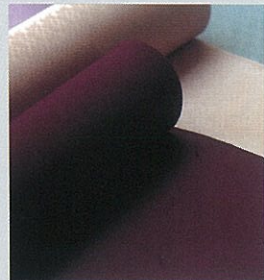


脱水した生地は、竿かけ、又は張干しにて自然乾燥をします。

東京無地染の歴史

古より衣服の最も基本的な染め付けは無地染（浸染）であり、草木の液を布地に色付けする事から始まりました。奈良平安時代には仏教の伝来と共に藍、紅花が渡来して、大和民族独特の染技術が確立され地染を初めとする染色は全て浸し染でした。絹織物の発達した鎌倉時代になると、草木染めに必要な灰汁、鉄媒染、酢の発達により紺屋職人の仕事は大きく進歩しました。江戸時代を代表する江戸紫は、武蔵野に自生した紫根からの産物で団十郎扮するところの助六愛用の鉢巻となり、封建時代に於ける庶民文化の中に隆盛をきわめました。

整理・検品



製品に応じて柔軟、糊付け等を行い、湯のし機にかけ、巾をととのえて最終検品をします。

張り仕上



染色された生地に、つや・質感を付けるため、刷毛で天然糊を引く作業をします。

ACCESS

東京メトロ半蔵門線・都営大江戸線
「清澄白河駅」徒歩5分



深川江戸資料館（レクホール）

〒135-0021 東京都江東区白河1-3-28 TEL 03-3630-8625 FAX 03-3820-4379